

「幸いなあなたがた、不幸なあなたがた」

(ルカによる福音書 6:17-26)

今日の福音は、マタイによる福音書では「山上の説教」で語られる箇所ですが、マタイでは山上で一部の弟子だけに語られたことが、ルカでは平地で沢山の人に向かって語られています。

主イエスが山で十二人の使徒を選び下山しました。すると、12人以外の沢山の弟子たちや、ユダヤのみならず広範囲からの人々が主イエスの話を聴くために集まってきました。イエス様は「目を上げ」て、「貧しい人々は幸いである…」と語り出しました。この「目を上げる」という表現は、「目が向けられた対象への深い関心」を表します。その目に写っていたのは、12人の弟子たちだけではなく、下山後にイエスのもとに集まった大勢の弟子や、おびたしい人々がいました。イエス様に聞くため、病をいやしていただくため何とかして主イエスに触れたい人々です。そこにいたのは、泣いている人、憎まれている人、飢えている人、貧しい人でした。イエス様は、深い関心を持ってこの人々を見つめ、「あなたがたこそ幸いだ」と言われたのです。

主イエスは、わたしたちのことを見つめ、心から思ってください方です。主イエスの憐れみとは、人間としての同情というだけではありません。その憐れみは、神様の人間への思いそのものです。神様はわたしたちの苦しみを苦しみのままに終わられられない方です。おびたしい数の人を見つめ、語りかけるイエス様を通して、その神様の有り様がわたしたちに示されています。

主イエスは「幸い」と語るときにも、「不幸だ」と語るときにも、「あなたがた」と語りかけます。わたしたちのなかに「幸い」と「不幸」のそれぞれの道を望む思いがあるからです。神を頼って生きるのか、それとも、富やこの世の権力に頼って生きるのか、わたしたちは選択することができます。後者を選ぶなら、「あなたがたは不幸だ。」と言われるように、これから先の喜びはありません。なぜなら、「もう慰めを受けている」からです。「受けている」と訳された言葉は、商業用語とされ、借金の返済を受け終わり、負債者に何も要求できない、「十分に受け取った」ことを表します。つまり、誰にも何も分け与えていない状態を表します。持っているものを分けず、自らの慰め、満腹、笑いのためだけに利用しているのです。しかし、自分の富だけを守ろうとするのではなく、他者と分かち合うなら、「受ける」喜びがあります。そこにこそ、神からの報い、喜び踊るほどの幸いがあります。